2Gp-5

着心地の良い衣服パターン設計（第４報）
― 官能評価の標準化 ―

文化女大家政○池田和子　佐藤眞知子　渡部旬子　宮川由香

目的：着心地の良い衣服パターンを設計する為には、まずパターンの良否の評価法が求められる。既報（１～３報）において、物理量としての計測方法について取り組み、データを積み重ねている。しかし実用化の為には解決しなければならない問題が数多く残されている。一方、現在のところ衣服パターンの評価は、仮縫い状態での着用による官能評価を用いることが多い。官能評価は簡単に結果が求められる所から広く用いられているが、手法そのものを吟味し標準化せずに個々に用いられる傾向がみられる。いずれ上記の物理量と対応していく上でもまず官能評価法そのものの標準化が必要と思われる。官能評価法は、サンプル差をとらえる手段として人間の五感を用い、その違いを言葉で表す。従って、その表現をする評価用語の選定と、センサーにあたる人間側（パネル）の精度の高さが前提条件となる。特にパネルの能力として最も大切な感覚の鋭敏さ、つまり識別能力が求められる。言わば機械センサーの感度にあたるものであり、非常に重要である。そこで本研究は、このパネルの精度について取り上げ、特にジャケットのパターン差を着用評価できる識別能力について検討を行った。

方法：パターンの背幅寸法のみを変えた標準サイズのジャケット５着を約150名の女子学生に着用させ、動き易さの良否を５段階絶対評価させた。

結果：ジャケットのパターン寸法の２cm差を識別出来たパネルは約６％と予想外に少ない結果となった。53％の約半数の人達は全く識別能力がないことが明らかとなった。実験を行なう上でのパネルの選定の重要性を明らかにすることが出来た。